

**<特集論文：「福祉の哲学，価値，思想」について
> 福祉を創る者：「体育学者」の実質をめぐる論
考**

著者	林 洋輔
雑誌名	人間福祉学研究
巻	11
号	1
ページ	91-101
発行年	2018-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029549

特集論文：「福祉の哲学、価値、思想」について

福祉を創る者

——「体育学者」の実質をめぐる論考——

林 洋輔

大阪教育大学教育学部講師

● 要約 ●

本稿においては「体育学者」の実質を明らかにする試みが行われた。

一方において、体育学を構成する者たちは必ずしも理論構築を事とする者ではないように思われる。他方、この学問によって生まれる「学知」は学問的方法および体系を前提として生まれるべきものとも思われる。現在に至るまで「体育学者」の実質は結論の出ないままである。

「体育学者とは何か」という問いへの答えは古代哲学へと目を向けることで明らかになる。「学知」とはわれわれの日常生活に有用であるか否かに存する。しかし現状では「学知」と呼ばれる知恵は制度学問のなかで生まれることを踏まえ、その知恵は体育やスポーツ、そして社会福祉に有用な知を提供するものであるとはいえ、学究の基礎づけを必要とする。

体育学者の実質とは、学究の基礎づけを有しながらもわれわれの日常生活のなかで有用であり、善く生きるために必要な知恵を自ら用いる「体育学-者」のことである。

● Key words : 福祉, 体育学, 学知, ビエール・アド

人間福祉学研究, 11 (1) : 91-101, 2018

1. 福祉の問い方——問題提起へ向かって

福祉と呼ばれるものを哲学の観点から問題とする場合、その問い方がまず問題となる。というのは、いわゆる哲学研究と呼ばれる領域において、福祉なる語彙をいわば議論の中心に据える事例は決して多く確認されるものではないからである。むしろこのことは哲学が福祉の諸問題に対して無関心であることを意味するものではなく、試みに辞書を紐解いてみるならば、「しあわせ・幸福」として福祉の定義が記載されている（西尾ほか、2000）。すなわち、福祉を問うとは幸福を問うことと同義であるとみなしてひとまずは差し支えないのであって——というのも、福祉と幸福の両概

念の差異を問うことも別途に哲学の問いたり得るから——、言うなら「幸福を問う」議論として福祉を論ずることも不可能ではない。

しかしながらこの「幸福を問う」議論において、具体的にはどのような行論が期待できるだろうか。ここでひとたび哲学史を顧るならば、古代のアリストテレスをまずは嚆矢として幸福の実質を論じた哲学者は古今に数多く指摘できるとはいえ、現代のわが国から見据えた時空の懸隔をいま想起するならば、過去の哲学者たちによる議論は現代の福祉や幸福を論ずる際の参考を出るものではない。したがって現代における幸福ないし福祉を問う場合、単に往時の哲学者による議論を精密に読解し分析するだけでは不十分であるとの批判

が予想される。

そこで、福祉の問い方を次のように考えてみよう。もし西洋古代哲学の議論にしたがって幸福がそれ自体で選ばれ目指されるものとするなら（アリストテレス，2002），その幸福であるための条件を検討することが福祉を問うて議論する際のアプローチとして挙げられる。より具体的に言えば，現代における幸福へ至る条件として多くの研究者が指摘する健康について，その健康であるための条件が端的に「栄養・睡眠・運動」として多くの論者より指摘されている。そしてこのことをさらに次の視角から考えてみよう。もし人間における栄養や睡眠そして身体運動の適切な在り方についての知識や知恵を生み，またそれらを他者に提供する役割を担うのならば，その提供者は人間における幸福の端緒を創る者，言うなら福祉を創る者であると言える。つまり福祉や幸福を提供する者，といった観点から福祉を問い，論ずるアプローチを確認できる。小括的に言えば，福祉の問い方としてその福祉を創る者——言うなら幸福を創る者——の観点から福祉の哲学ないしは思想を展開することも可能である。というのは，それを起点として福祉ないし幸福の端緒が拓かれるならば，その端緒で知識および知恵を提供する位置にある者の実質を問うこともまた，福祉の哲学ないしは思想の一部をなすものと考えられるからである。

ところで先に挙げた「栄養・睡眠・運動」のうち，人間の身体運動を主な研究対象とする体育学は19世紀末に学問としての所在が確認されて以来（日本体育学会，2006），わが国有数の学問分野として現今に至るまで多方面にて社会貢献を果たし続けている。そして周知のように，現在のところ15に分科された専門領域の一つに「介護福祉・健康づくり」が確認されるように，体育学は福祉研究の専門家を数多く擁する学問としても広く認知されており，体育学研究者はいわば福祉を創る者としても呼ばれるに値する研究を今なお進めている。

ところが，数学における数学者あるいは物理学

における物理学者といった意味において，体育学における体育学者の実質は未だ明らかではない。より具体的に言えば，多様な研究領域が蝟集する体育学に属する研究者の実質を統一的に指し示す体育学者について，その実質は未だ明らかにされないままである¹⁾。そして体育学者なる呼称が以後も恣意のままに用いられることは，体育学の実質ならびに斯学の研究者像を不明瞭なものとし，ひいては斯学に対する信頼の問題にまで事態の進展することは想像に難くない。

そこで本稿では以上の研究背景を受け，学術の側面より福祉を創る者，言うなら幸福を創る者としての体育学者の実質を明らかにし，以て関連研究者による議論の提起を本稿の射程とする。

2. 「生圏」のなかで

体育学の観点から学問の成果を生み出す体育学者がもし体育学に存在するとして，この学者たちはまずいかなる特徴を有する現代世界に向けてその成果を発信しているのか。別の言い方をすれば，そのなかでわれわれが生を営む現代世界とは，端的に述べてどのような状況であるか。この問いに対し，現代における「新しい倫理学」（今道，2011）としての生圏倫理学を提唱した今道は，われわれの生きる現代世界の有様を次のように纏める。

科学技術は手段としての性格を維持したまま，それを超えて，1960年ごろからは，ひとつの膨大な環境になってきました。これを私は「技術連関」と呼びますが，これが自然と並んで人間の新しい環境として定着します（今道，1990）。

彼が指摘するように，現代のわれわれは草木花鳥に囲われた世界のなかに生きるというよりも科学技術の産物に囲われて生きる存在であって，自らの創り上げた技術を自らの環境として生きる存

在であると彼は喝破する（今道，1990；1993）。すなわち、現代を生きる人間とは自らの生にとって有益利便な人工物に囲われて自らの処し方を考える存在と言える。この点について今道は次のように続ける。

今日では、（…）通信は世界的同時性を呈し、各種の交通機関も世界中に連絡網ができています。そういう大きな技術連関が組織的に世界的にできてきた時代だというのが、二十世紀後半の特色ではないかと思えます。そういう技術連関として見るかぎり、現代社会というものは、世界のどこにおいても同じ性格を持つと思えます（今道，1990）。

彼によれば、交通および通信をはじめとする技術体系のなかでわれわれは生きており、その環境の総体が「技術連関」（今道，1990；1993）としてわれわれを取り囲む状況にある。彼による指摘についてはKemp（2009）も述べるように、われわれは生活の利便を期して創り出した技術の網に圍繞されつつ生きる存在であり、そのなかでいわば自らの生き方の選択を迫られる状況にあると言える。

ところで、先の今道の指摘において、「技術連関」の確認され始めた時期は1960年頃とされた。この時期は1950年に改めて発足した日本体育学会に属する研究者、とりわけ体育原理分野の研究者が自らの属する体育学の在り方を模索し始めた時期とも重複する（前川，1958）²⁾。とりわけ体育学の学問体系を創る試み——いわゆる「分化と総合」をめぐる議論（体育原理研究会，1972）——を経たのち、石川の議論が学問としての体育学の果たすべき責務を次の通り指摘する。

人間の身体運動に対してあらゆる可能な側面から総合的にアプローチし、そこから得られた知見を、各個人の生涯にわたる福祉の実現のために利用することである。われわれは

体育・スポーツの個々の事象を科学的に究明し、少しでも多くの有効な知識を蓄積して、一般の人人の利用に供するよう努力することが重要であるといえよう（石川，1984）³⁾。

近年の指摘でも確認できるように（林，2015）、学問としての体育学はいわゆる真理の探求を志向するというよりはむしろ体育やスポーツ、そして介護福祉の現場と呼ばれる時空で有用な知見として有意味な知恵の探求を志向する学問とも言える。言い方を変えるならば、体育学とは確固不動の認識としての知識を追求する学問であるというよりは、実生活に有益な知見としての知恵を探求する学問である。すなわち一方では運動競技の勝利に裨益するものとしての知識および知恵を蓄積するとともに（Chandler, et al., 2007）、他方ではそれらの蓄積をもって人間の日常生活に向けた応用を企図する学問と小括し得る⁴⁾。このことは上記の石川の言及において、体育学の研究成果は福祉への貢献を最後のに期するものとの指摘からも裏付けられるだろう。すなわち、体育学の研究成果を「各個人の生涯にわたる福祉の実現のために利用すること」（石川，1984）とされるように、人間の実生活を生涯にわたり具体的に支える——成果が知識として認識されるだけでなく、その知識が知恵として用いられることで人間の実生活を支える——知見の提供が体育学の研究者、つまり体育学者に求められている。

ところでもし石川の指摘が妥当であるならば、解明対象としての体育学者の実質とはいわゆる真理の探求あるいは任意の問題事象の成り立ちや背景を説明する理論構築の専門家といった意味での学者ではない。むしろ身体に関わる教育としての体育や運動競技、さらに介護福祉を実践するなかで生じた諸問題を解決するために有用な知見の提供役として規定できるのではないか。すなわち、体育学者とは一般に想起される学究の徒、言うなら理論構築とその提供者としての学者ではなく、体育や運動競技、そして介護福祉に有益な知見の

提供を通じて社会に貢献する者を総称的に指す者とも考えられる。もし事態が上記のようであれば、体育学者を自ら任ずるためには敢えて体育学と呼ばれる学問に関わる理論の構築、さらには体育学の研究者であるための訓練などは不要と言える。なぜなら、体育学に関わる問題の解決に有益な知見を提供することが体育学者の役割とするならば、当該の知見の提供を通じて問題解決を図る人間は必ずしも理論家である必要はなく、体育学者とは通称される意味での「学者 Scholar」でもないことがこれまでの議論からも明らかだからである。

むしろ、上記の議論に対しては次の通り論駁をなし得るだろう。なるほど一方では人間の実生活に裨益する知見を生み、いわゆる身体運動科学の問題解決に貢献することは体育学の研究者が担う責務とは言え、他方ではスポーツ科学を研究対象とする場合（朝比奈ほか、1977）でも運動競技あるいは教育の諸問題解決に利する実践知の追求ばかりが体育学で行われているわけではない。すなわち、実用的な知見ばかりを体育学の研究者が追い求めているわけではないことが体育史やスポーツ人類学といった現行の体育学で重要な貢献を果たし続ける専門領域の研究結果からも明らかである。それどころか、学問として自ら任ずるための必須要件が理論の構成、すなわち「体系 System」の構築であることは学問の歴史を顧みることですぐに確認できる（Hadot, 2014b; Jordan, 2004）。すなわち、体育学者も実用的知見の提供とは別の探求課題として学術理論を構築し、以て体育学における知の体系を組織立てる者の謂いであるとの立場も成立し得る。現に分野を問わず主張と論駁とをとり交わすなかで歴史的に或る任意の学問が形成されてきたことは多くの論者が明らかにする通りである（中山, 2013）。それゆえ体育学もまた学説の主張とそれへの論駁を契機として知の理論および体系が築かれるのであって、それらを築く者こそ体育学者の名に相応しいとする議論は容易に察せられる。それゆえ、学問に携わる者が理

論および体系の構築を試みる責務を担うのならば、やはり体育学者とはまずもって理論の構築を第一義とする学者であって、体育や運動競技、そして介護をはじめ人間の福祉に関する体系的な思索を重ねてその成果を論理立てる者こそ体育学者と呼ばれるに相応しい、といった立論も可能である。小括すれば、体育学とは今もって続く論争の学問の系譜を継ぐ学問であって、体育学者もまた最広義に指定される意味での体育を扱う理論家・体系家に他ならないとする議論も等閑視できない。

以上の議論から、研究成果の現場への還元と理論構築に対する責務をめぐって体育学者の実質についての回答は分裂状況にあると言える。すなわち、体育学者とはどのような者であるかについて、体育学の過去と現状を踏まえても確定的な回答が困難な状況と言える。

ところで、このように学問によって生み出される知識としての学問知、言うなら学知とは元来いかなるものであったか。すなわち、学問により生み出される学知とは誰がどこへ向けて生み出すものであったのか。もしこの問いに対して回答し得るのならば、学問に携わり学知を学ぶ学者の実質解明についても手がかりが得られるかもしれない。というのも、学者の追求する学知の実質や身分が明らかになるならば、その学知を学ぶ学者の実質もまた、明るみになることが期待されるからである。そこで次節では、学問の始源としての古代哲学に検討の舞台を移して体育学者の実質をめぐる議論を継続していく。

3. 「学知 *Scientia*」の向かう先

学知とは何よりもまず、人間の生き方に資する知であったようである。未だ学問と哲学とが未分化⁵⁾である古代の哲学、そしてその成果を享ける人間の関係について、20世紀フランスの哲学者・古代哲学史家であるピエール・アドによる次の指摘を参照しておきたい。というのは、彼による以下の言及においては哲学が往昔にどのような意図

のもとで学ばれていたかが示されており、その記述により学問研究の成果としての学知の身分およびその生産者——つまり学者——の位置づけを明瞭化する示唆が与えられるからである。

ある人々が哲学に入門すること〔についてわれわれが述べるの〕は、宗教に入信し修道士たらんことを期する者についてわれわれが述べるがごとくである。彼らが或る学派を選ぶのはその学派の提案する生の様式 *mode de vie* に応じてのことであり、彼らは密接な関係を結んでいた主宰者 *maître* による信条の方針 *la direction de conscience* に従うことになる。また他の人々が哲学を聴講するのは自らの一般教養 *culture générale* を完成させるためである。つまり、時として〔この人々は国政の〕管理者であり、未来の政治家であった (Hadot, 2010)。

すなわち一方では自らの「生の様式」、言うなら生き方の確定に向け哲学を学ぶ者の在り方が指摘されている。また他方では哲学を経世の手段として学び、以て政経分野に参画を期する者の存在が指摘されている。ところで確認しておきたいのは、哲学と学問が未分化である古代ギリシアにおいて、学問による知識——つまり学知——とは常に学ぶ者の「生き方」に資する位置を占めていたことである。古代における学問、言うなら哲学が人間の生に資する意図のもとに教授されたことはすでに欧米の哲学研究者によって多々指摘される場所であるが (Cooper, 2012; Pavie, 2012)、語義の本来の意味における哲学が「生き方の実践」であってそれに伴い生まれた学知が人間の生き方に資すべきもの、との認識は哲学史を通底すると見える (Domański, 1996; Pavie, 2014)。このことを別の角度から言い直すならば、「精神の修練 *Spiritual Exercise*」——またの名を「生き方としての哲学 *Philosophy as a Way of Life*」——として総括されるこの哲学観・学問観によれば、学知

とは生き方に資するもの、その可能性をもつもの、そして資すべきものとされる。すなわち、任意の学知とは現行の学界で名指される理論知、あるいは実践知といった画定を受けるものではなく (藤澤, 1985)、いわば自らの生き方に資する知の程度に応じてその意義の程度が吟味されたと言える。それゆえ上掲の Hadot によれば、どのような哲学を支持しどの学知を用いるかの決断が直ちにその人間の生き方を表すものとなる。彼による次の言及を参照しよう。

〔哲学および学問とは〕知恵に達するためのその精励 *effort* およびその修練 *exercice* における「生き方 *Manière de vivre*」であり、そして知恵そのものを目標 *but* とすることにおける生き方であった (Hadot, 2002)。

時に体系的な哲学として名指されるアリストテレスおよびストア哲学においてさえ、上記のことは確認できる。例えばアリストテレスにおいて「観る *theoria*」ことにおける幸福と、政治をはじめ日常における幸福とが判明に区別されていたとはいえ、両者ともに学知を通じて人間における幸福の根拠としての「知恵」の獲得に向かうべきことが彼のテキストのうちに読みとれる (Hadot, 1995)。すなわち多くの研究者によって体系的哲学の典型とも指摘され得る彼の哲学とは、学知を根拠とする幸福な生を目指すためのものであって、人間の生に直結する学知の獲得が望まれていると言える。

他方、ストア哲学は理論的側面と実践的側面が「切り離し得ないもの *inseparable*」として人間の生に資する形で結びつく (Hadot, 1995)。すなわち、一方では「論理学 *Logica*・自然学 *Physica*・倫理学 *Ethica*」と三分割される彼らの体系とは、その哲学に従事する者各々が自らの生を「善く生きる」ための知が集約されたものである。このことを言い直すならば、ストア哲学の哲学者たち——とりわけセネカやマルクス・アウレリウス、

そしてエピクテトスといった哲学者たち——において言及される知とは、人間が自らの生において使用し有益であることを前提としてその身分が定まったものである (Hadot, 2014a; Sellars, 2009)。このことを踏まえ、哲学すなわち学問の成果として生み出される学知⁶⁾が人間の生に活かされる有様について、Hadot にその具体を訊こう。

哲学とは実効的にして具体的な生きた修練 l'exercice のことであった。すなわち、〔哲学とは〕論理学・自然学・倫理学の実践 la pratique である。真の論理学とは論理についての純粋な理論ではなく、むしろ活かされた論理 la logique vécue であって、適切な仕方
で考える活動、日々の生において適切な仕方
で自らの思索を修練する活動である。(…)
真正なる倫理学とは倫理についての理論ではなく、他の人々との生活のなかで活かされた倫理学 l'éthique vécue のことである。(…)
真の自然学とは自然学についての理論ではなく、活かされた自然学 la physique vécue つまりコスモス cosmos に対する人間の或る態度のことである。この生きた自然学は何よりもまず、事物をあるがままにおいて観ることに存する (Hadot, 2001)。

以上より学知とは人間の生に活かされ、その日常の生に資するものとして位置が定められる。ところで、以上までの議論は本稿の問いである「体育学者」の実質解明に対してどのような意味をもつか。この問いに対して答えておきたいのは次の二つのことである。第一に、学知が人間の生に資するものであるならば、体育学者が生み出し用いる学知とは自他の生に裨益するとともに、当該の知は学問体系のなかで理論的な裏付けをも必要とする。なぜなら、先のストア哲学における理論と実践の表裏一体が指摘されたように、人間が生きるなかで用いる学知は理論としてもその位置づけを与えられるからであって、端的に言えば「理論

に裏付けられた実践知」が学知であると言える。そして体育学者が理論を保持しながら「他者への貢献」あるいは「実際の学問」に携わるのならば (林, 2015)、これまでに述べてきた学知の生産が責務となる。第二に、古代において学問を司る者、すなわち現在の「学者」の源流である哲学者たちのうちには必ずしも理論構築を責務としない者たちを確認できる⁷⁾。そこで、体育学に従事する体育学者もまた、制度学問としてのアカデミズムには必ずしも帰属せず、また必ずしも理論の構築を責務とする者には限定されない。このことを踏まえ、哲学と学問を同義に捉える前提のもとで「体育学者」の実質について次節で明らかにしていく。

4. 学問と「生き方」

前節までの議論を踏まえるに、学者とは自ら習得した学知を以て自らの生き方を歩む者と言える。なぜなら、学知とはその習得によって学ぶ者をその生き方において「変容 transformation」させるものだからである (Pavie, 2015)。この「学知を通じた自己の変容」事例としては、著名なアウグスティヌスの『告白』における以下の言及を挙げる。

ところで、この書物は、私の気持を変えてしまいました。それは、主よ、私の祈りをあなたご自身のほうにむけかえ、願いとのぞみとをこれまでとは別のものにしてしまった。突然、すべてのむなしい希望がばかげたものになり、信じられないほど熱心な心で不死の知恵をもとめ、立ちあがって、あなたのほうにもどりはじめました (アウグスティヌス, 2009)。

キケロの散逸した著作『ホルテンシウス』の読書経験によるアウグスティヌスの表白である。上記の言及に対しては Stock (1998: 2001) ははじめ一義的な解釈を許さない研究史が蓄積されている

一方、学知との邂逅が生き方を変容させる事例と言える。上掲のHadotが指摘するように、学知が実生活に活かされた場合にそう呼ばれる知恵とは、それを獲得した者に対して「単に認識をもたらすばかりではなく、〔その者を〕違ったように在らしめる」ものである(Hadot, 2002)。つまり、学知を通じて人間の生き方が漸進的に——というのは、知恵としての学知の獲得によって、直ちに人間が変容することの確証は未だ得られていないのだから——変容すると小括できる。

ところで、こうして学知を自らの生き方に反映させることで生き方の変容を果たす学者とは、それではどのように定式化されるだろうか。見方を変えて言い直すならば、体育やスポーツ、そして福祉の現場に裨益する学知としての知恵を提供する立場である体育学者とは、どのようにその実質が定められるだろうか。Hadotは学者の源流に位置づく哲学者と学問との関係を次のように語る。

古代における哲学者とは必ずしも——過度にそう考えられる傾向のあるように——哲学の理論家ではない。古代における哲学者とは哲学者として生きる者、哲学に拠って生きる者のことである(Hadot, 2013)。

哲学を「生き方の選択」およびその生き方の実践として捉えるHadotによれば、著作とは哲学者あるいは学者であるための条件ではない。もし書物が著されることで何らかの体系が哲学者あるいは学者を通じて構築されとしても、それは彼らが哲学者あるいは学者と呼ばれるための十分条件ではない。むしろ自ら同意する教説のいわば根本原理に即して生きる者が哲学者、言うなら学問を体得して生きる者である(Hadot, 2013)。踏み込んで言えば、通称される意味での学者、すなわち「スカラ- Scholar」という語彙に含まれる講壇学者の意味に「学者」の概念を限定してはならない。なぜなら、学問に拠って生きる学者とは、その成果をいわば「善く生きる」ために用いるこ

とのできる者をも指すからである。むしろ、^{アカデミズム}制度学問のなかで様々な形態を取りつつ理論から学問の講じられてきたことはつとに指摘される(Büttgen, 2009)。しかし、学問の諸分野において例えば「物理」や「歴史」といった接頭辞あるいは限定詞を問わずして、「学者」とは自らの研究成果を生きる者、いわば実地に学問を生きる者、「学問を使う」者を指すと言える。そのことは学知による自己変容および生の改善を期す「生き方としての哲学」の実質が次のように示される通りである。

「生き方としての哲学」により約束されるのは単に知識の蓄積あるいは才知 clever の提示であるばかりではなく、真正なる変容のプロセスである。その変容のねらいは〔この哲学の〕実践者がまず自らの世界観を変じ得るようにすることである。またその後の帰結として、或る新しき異なった在り方であり得るようにすることである(Chase, 2013)。

「学者」とは理論を構築することあるいは術語を発明する専門家に限られるものではなく、学知——それも人間の日常を変え得るものとしての知恵としての学知——を獲得し学知を用いて善き生き方を志向する人間を指す。なぜなら、学問の成果としての学知とは人間の実生活に使用されるものであり、各人の考える善き生に向けた使用が本来的に学者の期するところだからである。それゆえ、次の通り述べよう。体育学者とは、体育学の理論構築を事とする者に留まらず、体育学の研究成果——それが理論であれ日常生活に適用できるものであれ——を自らの生に適用させ、それに拠って善き生を期する者、これが「体育学-者」であると結論づけられる。

5. 結論と展望

体育学者の実質は次の通り定められる。すなわ

ち、体育学の研究成果を自ら実践しそれを用いる者としての体育学-者であり、その条件を満たすものが語彙の真の意味での体育学者として定められる。

以後における研究の展望としては次の二つが挙げられる。第一に、体育学がいかなる学問であるか、そして体育学者の実質がどのようなものであるかについては一つの回答が示された。他方、体育の概念についてはその外延がおおよそ見えるばかりであり、この概念の実質（内包）については依然として議論の余地が残されている。とりわけこの概念に本来与えられた「教育」と直接の関わりをもたない研究が体育学の研究として定着した現況を踏まえるならば、「体育」概念の再定義がいま必然的な検討課題とされ得る。

第二に、学問の成果としての学知が自他の生に裨益するとの言い方の背後には、その知が抛る世界観——言うなら世界認識——が前提とされている。すなわち、学知が人間に対してなぜどのように寄与するかについての検討を行うのならば、まず人間とそれを囲む環境についての検討、つまり「自然哲学」へと議論の歩を進めることが適切である。なぜなら或る学知が人間の生に寄与するのならば、その学知とは人間が依拠する世界認識を前提とした上で生まれるものであり、人間の生き方を環境の視点から規定する自然哲学についての議論が今後に期待されるからである。

注

- 1) これまでの先行研究において、「体育学者」なる呼称について学術の文脈で取り上げられたものには少なくとも次の2件が該当する。しかし、いずれも便宜上の呼称として用いるにとどまるものであって、「体育学者」の実質を精密に検討した上で用いられたものではない。太田裕造「ソ連の革命前の体育学者ペ・エフ・レスガフト(1837-1909)の体育思想」『福岡教育大学紀要 第5分冊 芸術・保健体育・家政科編』(29), 1979, pp. 109-111. 宮下充正「体育学者の

TWITTER—遠回しに説明しなければ、研究の意義がわかってもらえない』『体育の科学』61(1), 2011, pp. 73-75. 両論考の表題から見ても、「体育学者」の呼称は未だ確定した実質をもつ用語ではない。

- 2) 前川峯雄『体育学原論』中山書店、1958年、28頁における次の「体育学の定義」は「体育学とは何か」を問う諸研究者によってしばしば指摘される。「体育学は、身体練習による人間の身体的形成の原理と法則とを研究し、健康の増進、身体的発達への助成をし、身体活動ならびに、それに関係する経験を通して、望ましい社会性を育成し、生活を豊かにするための科学である」。
- 3) ただし石川は「体育学」との呼称に代えて、「体育の科学」あるいは「スポーツの科学」の呼称を採用する。本稿は当時の「体育学」に含まれる研究対象を勘案し、各名称の実質をほぼ同義に捉える。
- 4) 現行の日本体育学会における「介護福祉・健康づくり」専門領域において、体育学に蓄積された自然科学の知を社会福祉に転用する意図のあることは領域名から察せられる。
- 5) 本稿においては以下、学問と哲学をほぼ同義とみなして議論が進行することに留意されたい。というのも、本稿では現在の制度化された学問分野としてのみ「哲学」の観念を捉えてはいないからである。本稿での後掲および以下の文献において田中がキケロおよびアウグスティヌスを引用して述べるように、古代において学問と哲学はほぼ同義の営みであり、その学統のもとで本稿は議論する。田中美知太郎『学問論：現代における学問のあり方』筑摩書房、1969年、14頁における以下の言及を参考。「Philosophiaというのは<学を好む>とか<道を求める>と同じような意味で、非常に意味が広い。<学問をする>ということとは philosophia (知を愛し求める) というのと同じである。キケロはそれを広い意味において使っているわけだ。だから現代の非常に専門化した哲学をすぐ考えてはいけない。いったい専門化した哲学などというものがあり得るのかどうか、哲学の本来からいって疑問の点がある。とにかく、そういう哲学ではなく、学問を愛する、知を求めるということをすすめる、励ますという意味で、アウグスティヌスも philosophia ということばを使っていると考えていい。そしてそういうことのすすめが説かれているものとして、キケロの書物を読んで感激したと言っているわけだ」。

- 6) 古代において学問と哲学が同義とみなされる、とする立場とその議論が現在の体育学および「体育学者」の実質解明についても同じく同一線上に語られて良いとする根拠は何か。「理論を構築する営み」としての学問と「生き方に資する知の提供」としての学問は常に表裏一体であると言える。すなわち、制度化の有無とは別に理論体系を構築し世界と現実を説明するものとしての「学問」が一方では古代から存立するとともに、他方では人間の生き方に資する（学）知を提供するものとしての「学問」は常にその歩みをともしてきたと言える。したがって学問として定められるための必要条件を「理論構築」および、「生き方に資する知の提供」の両者として捉えた場合、古代における「学問と哲学の同義」とは、上の両者が維持されていると言う意味において、現在の学問および体育学の性格とも重ね合わせることができる。つまり、古代における「学問＝哲学」の図式は現代の体育学を含めた学問一般にも当てはまる、と考えられる。
- 7) 「樽の中の哲学者」と呼ばれる「シノベのディオゲネス」、また古代ローマ期におけるエピクテトス、また彼が師事したストア派の哲学者ムソニウス・ルフス (Musonius Lufus) もまた、著作のない哲学者として挙げられる。次節で言及するように、哲学者とは自らの言動に理論的な裏付けを求め得るとは言え、必ずしも理論構築を事とするものではない。

参考文献

- アリストテレス (2002) 『ニコマコス倫理学』京都大学学術出版会。
- 朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編 (1977) 『スポーツの科学的原理』大修館書店。
- アウグスティヌス (2009) 『告白(上)』中央公論新社。
- Büttgen, Philippe (éd.) (2009) *Vera Doctrina: Zur Begriffsgeschichte der Lehre von Augustinus bis Descartes*. Harrassowitz Verlag in Kommission.
- Chandler, Timothy; Cronin, Mike & Vamplew, Wray (eds.) (2007) *Sport and Physical Education: The Key Concepts*. Routledge.
- Chase, Michael (2013) Observations on Pierre Hadot's conception of philosophy as a way of life," in: Chase, Michael; Clark, Stephen & McGhee, Mihael (ed.) *Philosophy as a Way of Life: Ancient and Moderns Essays in Honor of Pierre Hadot*. Blackwell.
- Cooper, John (2012) *Pursuits of Wisdom: Six Ways of Life in Ancient Philosophy from Socrates to Plotinus*. Princeton: Princeton University Press.
- Domański, Juliusz (1996) *La Philosophie: Théorie ou manière de vivre? Les controverses de l'Antiquité à la Renaissance*. Cerf.
- 藤澤令夫 (1985) 「実践と観想——その主題化の歴史と問題の基本的筋目——」大森莊蔵他編『岩波講座 哲学10 行為 他我 自由』, 岩波書店。
- Hadot, Ilsetraut (2014a) *Sénèque: Direction spirituelle et pratique de la philosophie*. Vrin.
- Hadot, Pierre (2014b) Les divisions des parties de la philosophie dans l'Antiquité, in: *Discours et mode de vie philosophique*. Xavier Pavie (éd.) LES BELLES LETTRES.
- Hadot, Pierre (2013) *Introduction aux «Pensées» de Marc Aurèle*. Livre de Poche.
- Hadot, Pierre (2010). L'enseignement des antiques, l'enseignement des modernes: Entretien entre Pierre Hadot et Arnold I. Davidson École normale supérieure, 1^{er} juin 2007, in: *l'enseignement des antiques, l'enseignement des modernes*. Arnold I. Davidson et Frédéric Worms (éd.) Éditions Rue d'Ulm.
- Hadot, Pierre (2002) *Exercices spirituels et philosophie antique*. Albin Michel.
- Hadot, Pierre (2002) *La Philosophie comme manière de vivre. Entretiens avec Jeannie Carlier et Arnold I. Davidson*. Livre de Poche.
- Hadot, Pierre (1995) *Qu'est-ce que la philosophie antique?* Gallimard.
- 林 洋輔 (2015) 「体育学の全体像および独自性の解明に向けた試論：ルネ・デカルトにおける「学問の樹」を手がかりとして」『体育学研究』60 (1), 117-136.
- 今道友信 (1990) 『エコエティカ：生圏倫理学入門』講談社。
- 今道友信 (1993) 『自然哲学序説』講談社。
- 今道友信 (2011) 『未来を創る倫理学：エコエティカ』昭和堂。
- 石川旦 (1984) 「体育・スポーツの学問的研究の分野」浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編『現代体育・スポーツ体系(第1巻): 現代体育・スポーツ総論』講談社。
- Jordan, William (2004) *Ancient Concepts of Philosophy*. Routledge.
- Kemp, Peter (2009) *Préface*, in: Chardel, Pierre-

- Antoine; Reber, Bernard & Kemp Peter (éd.), *L'ÉCO-ÉTHIQUE de Tomonobu Imamichi*. Sandre.
- 前川峯雄 (1958) 『体育学原論』中山書店.
- 宮下充正 (2011) 「体育学者の TWITTER—遠回しに説明しなければ, 研究の意義がわかってもらえない」『体育の科学』61 (1), 73-75.
- 中山茂 (2013) 『パラダイムと科学革命の歴史』講談社.
- 日本体育学会編 (2006) 『最新 スポーツ科学事典』平凡社.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 (2000) 『岩波国語辞典 第五版』岩波書店.
- 太田裕造 (1979) 「ソ連の革命前の体育学者ペ・エフ・レスガフト (1837-1909) の体育思想」『福岡教育大学紀要 第5分冊 芸術・保健体育・家政科編』29, 109-111.
- Pavie, Xavier (2012) *Exercices Spirituels: Leçons de la philosophie antique*. LES BELLES LETTRES.
- Pavie, Xavier (2014) *Exercices Spirituels: Leçons de la philosophie contemporaine*. LES BELLES LETTRES.
- Pavie, Xavier (2015) *Le Choix d'exister: Se Convertir à une vie meilleure*. LES BELLES LETTRES.
- Sellars, John (2009) *the Art of Living: The Stoics on the Nature and Function of Philosophy*. Bristol Classical Press.
- Stock, Brian (1998) *Augustine the Reader: Meditation, Self-Knowledge, and the Ethics of interpretation*. Belknap Press of Harvard University Press.
- Stock, Brian (2001) *After Augustine: The Meditative Reader and the text*. Pennsylvania State University Press.
- 体育原理研究会編 (1972) 『体育学の分化と総合』不味堂出版.
- 田中美知太郎 (1969) 『学問論: 現代における学問のあり方』筑摩書房.

Creating our welfare: An essay on the nature of scholar of Taiiku-Gaku

Yosuke Hayashi

Faculty of Education, Osaka Kyoiku University

In this paper, we clarify the features of *scholar* of Taiiku-Gaku (Science of PE, Health and Sports Sciences). In the extant literature, few attempts have been made to determine the characteristics of such scholars. It seems instructive to discuss them, since these are the people who will create our welfare from the academic side.

On the one hand, the mission of Taiiku-Gaku is to contribute *useful* knowledge towards various aspects of PE, social welfare, and competitive sports. So, it seems that those who constitute the group need not necessarily be theoreticians. On the other hand, since Taiiku-Gaku has been an academic discipline since the 19th century, it seems that the scientific knowledge produced thereby should be presupposed to be according to some academic method or system. So, no conclusion has heretofore been made on the identity of Taiiku-Gaku scholars.

The answer seems to emerge if we turn our eyes to ancient philosophy. The significance of scientific knowledge resides in utilizing it for our everyday life. But, since wisdom is currently supposed to be based on academic research, it is true that scientific knowledge, or wisdom, produced by Taiiku-Gaku should not only contribute to those who practice sport, PE and social welfare, but should also be grounded on academic research.

We reconsider the word “scholar” itself, and find that the identity of a scholar of Taiiku-gaku is, in fact, the identity of an *erudite* scholar who in everyday life utilizes his own wisdom, grounded on academic research, for creating a good life.

Further discussion treats the notion of Taiiku, which is different from that of physical education.

Key words: welfare, Taiiku-Gaku, scientia, pierre hadot